



～あんず通信では感染症の流行状況を毎月お知らせしています～

2月：如月（きさらぎ）

2月2日は節分、3日が立春です。暦の上では春ですが、雪が降ったり、氷が厚くなったりと一年で最も寒い時期です。杉の花粉が飛んで花粉症の患者さんが増えています。もうすぐ春ですね。

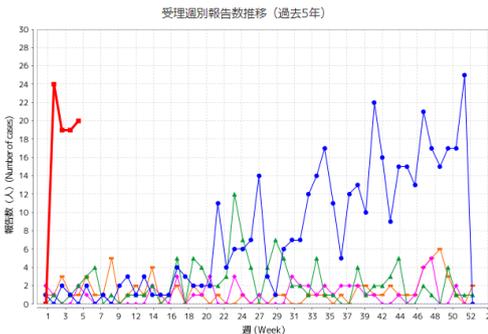
【感染症だより】

～溶連菌(Strep Throat)について～

東京都では溶連菌が昨年に引き続き多く報告されています。症状は、発熱、咽の痛みが主ですが、舌が赤くなったり、首のリンパ腺が腫れたり、目の充血、発疹、嘔気、腹痛、関節痛などがみられることもあります。溶連菌感染症のみでは咳が出ることは少なく、咳が出る場合には風邪を伴っているかもしれません。診察所見や咽のぬぐい液の迅速抗原検査で診断されます。治療は抗生物質を7日から10日間内服して、除菌を行います。合併症を起こす事は滅多にありませんが、急性腎炎やリウマチ熱を起こすことがあります。無症状のお子さんでも10-30%が保菌しているという報告がありますが、基本的に無症状の方は治療対象ではありません。何度も繰り返している場合にはご家族と一緒に除菌治療を行う場合があります。

～百日咳(Whooping Cough)について～

百日咳は、特有の咳が長期間続く感染症です。病原菌は、百日咳菌(*Bordetella pertussis*)という細菌です。日本では1981年から百日咳ワクチンを含む三種混合ワクチン(DPT)が導入され、患者数減少に貢献しました。令和6年度からは乳児に五種混合ワクチン(DPT-Hib-IPV)が導入され、三種混合にポリオワクチンとヒブワクチンが加わった五種類の混合のワクチンとなっています。しかし、乳児期の百日咳罹患数は減少したものの、小中学生以上では数年に一度流行を認めています。最近では、2016-2017年に流行しました。東京都では令和6年後半から報告数が増えており、令和7年1月も引き続き高い水準となっています(下図青線が2024年、赤線が2025年)。



症状は主に咳で、発熱はあまりありません。風邪症状で始まります。初めの2週間で徐々に咳の回数が増えていきます。2-3週目になると、発作性の咳になっていきます。短い乾いた咳が連続して起こり、続いて息を吸うときにヒューという音がすることがあり、このような咳発作が繰り返し起こります。特に6か月未満の乳児が罹ると痙攣や無呼吸発作、チアノーゼを起こしてしまうことがあることから、2か月から定期予防接種を行っています。2-3週間経過すると激しい咳は収まってきますが、全経過で2-3か月間咳が出ます。

治療は、マクロライド系抗生物質を内服します。学校保健安全法では、特有の咳が消失するまで又は5日間適正な抗生物質の治療が終了するまでは出席停止とされています。

表：1月しみず小児科・内科クリニックで診断された流行性の感染症

	感染症	患者数
1	溶連菌	86
2	胃腸炎(ノロ47例ノ1含む)	70
3	インフルエンザA	56
4	新型コロナウイルス	14
5	リンゴ病(伝染性紅斑)	13
6	インフルエンザB	3
7	咽頭アデノウイルス(7-ル熱)	2
7	ヒトメタニューモウイルス	2
9	RSウイルス	1
9	手足口病	1

あんず通信バックナンバーはクリニックホームページからご覧になれます



～あんずからのお願い～

★空き状況はWebで

しみず小児科・内科クリニックのホームページから確認出来ます。ご予約は必ずお電話でお願い致します。



➡ 空き状況はこちらから

★キャンセルをされる場合

留守番電話で構いませんので当日8:30までに必ずご連絡をお願い致します。利用ご希望の方が1人でも多く入れるようご協力をお願い致します。

★ご予約の際の注意事項

診察を受けた病名によって、お部屋割りをしています。なるべく同じ病気のお子様がおなじお部屋にすることで、子ども同士の伝染を防ぎます。また、インフルエンザや新型コロナウイルスの接触歴、流行状況等をお聞きしております。ご協力を宜しくお願い致します。

